

---

# スカーレット

雨音咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スカーレット

### 【Nコード】

N8532A

### 【作者名】

雨音咲

### 【あらすじ】

中学3年生。松下結衣は恋をした。しかも、学年1の美少年、南隆宏に！！2人が繰り広げる、温かくて、切なくて、思わず泣けちゃう恋愛小説。

第1話：恋愛音痴 from: yui

「結衣、俺：お前のことが好きだ。俺の彼女になってほしい」

私、松下結衣は桜中学の3年生。まつしたゆい一応バスケット部のマネージャー。  
そして、私の片思いの相手、南隆宏はバスケット部のエース。みなみたかひろ

この前、そんな南君に告られる夢を見た。

「好きだ。彼女になってほしい」なんて本当に言われたら…。  
そんなこと有るはずが無いと思ったら、「はあー…」とため息が漏れた。

「結衣、部活行こうよ」

そう言って声をかけてきたのは冴木えみ（さえきえみ）。一緒にバスケット部のマネージャーをやっている私の親友。

「うっ…うん」

「結衣！またあの夢のこと考えてたでしょ！」

体育館に向かう途中の廊下でえみが言った。

「なっ！なんで分かるの！？」

「顔がにやけてたんだよね。本当に南君のこと好きなんだね」

私は恥ずかしくて下を向いた。

「そんな恥ずかしがらなくてもいいよ。人を好きになるって大事なことだよ。…でもなんで告らないの？」

「私だってそんなバカじゃないよ。南君に告ったってフラれるって分かってる…」

南君は3年の中でも1位2位を争う人気者。背が高くて、かつこ良くて、おまけに性格も良い。

「でもさ、フラれてもOKでも気持ちを伝えることに変わりはないじゃん。それに私達3年だよ！中学校生活だってあと1年だよ！このまま告らないで高校行ってもいいの？」

「それは、そうだけど…」

どうしよう。私だって告れるものなら告りたい。

でも多分出来ないだろう…。

もちろん、相手が南君だからということもあるけど、もうひとつ理由がある。

私は…男の子が…というか恋愛に対して「音痴」なのだ。

音痴というよりも…今までこんなに人を好きになったことが無いから、どうすればいいかがまったく分からない。

これからどうすればいいものか…。

## 第2話：期待と不安 from：yui

体育館では、女子バレー部（通称：女バレ）と南君のいる男子バスケットボール部（通称：男バス）が練習している。

私とえみが体育館に着くと、ちょうど2つとも休憩をしていた。

私は南君を見た。何人かのメンバーと一緒に楽しそうに喋っていた。カッコいいなあ…。そう思っただけだと私の耳に女バレの話し声が聞こえてきた。

「南君カッコいいよねえ」

「なんで彼女いないんだろうねえ」

すると1人の女の子が急に声を小さくして言った。

「私…この前、南君に告ったんです…」

女バレのメンバー全員の視線が1人の女の子に移った。

その女の子は2年生だった。可愛くて、女バレの3年の間でも性格がいいと噂の女の子だった。

（南君後輩にも人気あるんだなあ…）

「それで、『好きな人がいるから、付き合うことは出来ません』って言われちゃいました…」

みんなが一旦「可愛そうに」顔をしてから「ちょっと待てよ！」という顔つきになった。

「南君で好きな人いるの!?それっていったい誰!!」  
その声は体育館全体に木霊した。

もちろん南君にも聞こえてしまった。

女バレの人は「しまった!」という顔つきをしていた。

さっきまでにぎやかに話していた南君は、その言葉を聞くと、顔を赤くして下を向いていた。

すると周りにいた4・5人の男子が、笑いながら南君のことをはやしていた。

南君は本当に恥ずかしそうにしていた。

南君の好きな人っていったい誰なんだろう…。

「結衣さ〜ん!!」

振り向くと、そこには西野君こと西野隼人<sup>にしのはやと</sup>がいた。

彼はバスケット部の2年生で、南君のことをとても慕っている。

そのかわいらしい顔はまるで女の子みたいで、3年生の間では「カワイイ」と評判の男の子だ。

「この時間に来るってことは、また補習でもしてきたの?」

「いやあ、この前のテスト全部赤点で…。早く部活行かしてくれ!  
って先生に頼んだんですけどねえ」

「西野お！練習始めるぞ！」

そう言っているのは、さっきまで恥ずかしがっていた南君だ。

「はぁーい！！！」

南君はちゃんとONとOFFを持っている。遊ぶ時は遊ぶ。練習する時は練習。

(…そういう所もカッコいいんだよね…)

「じゃあ練習行ってきます！僕のスーパープレー見ててくださいね！」

「分かった、分かった。頑張ってね！」

…後にこの西野君が、私の恋に大きく関わるなんて、この時は思ってもいなかった。

### 第3話：期待と不安・2 from:emi

「お疲れ様でしたぁー！」

今日も無事部活が終わった。私は真っ先に結衣の所へ言った。

「結衣！休憩時間の時の話聞いてた！？」

「聞いてたに決まってんじゃない！！もおさつきから気になっちゃって……」

「もしかしたら結衣のこと好きだったりして……！」

「ばっ……ばっ！そんなはず無いよ！」

「だって南君、結衣のことよく見てる気がするよ」

「きつ、気のせいだよそんなの！……それに、そんなこと言うと変な期待しちゃうじゃん！」

結衣は、顔を真っ赤にした。そして「片付けしてくる」と言っ走って行ってしまった。

「たく、この子は鈍感だなあ……」。

自分ではモテないって思ってるみたいだけど、結衣は結構男子から人気らしい。

多分男子は、ああやって恥ずかしがったりしている初々しい結衣の姿を見て「可愛い！」と思うのだろう。

私も一緒にいて可愛いなあと思うし。きっと南君だって、そう思ってるんじゃないかなあ。

……ちなみに私はこういう情報を色々知っている。

「えみい」

そういつてやってきたのは、私の彼氏、翔太こと山本翔太<sup>やまもとしょうた</sup>。バスケット部のムードメーカーで、南君とすごく仲が良い。

一見軽い男に見えるけど（私も前まではそう思っていた）本当はすごく優しく、良い奴。

…ちなみに、私の情報の約80%は、この男から聞いたものである。

「ねえ、翔太。南君って誰のこと好きなのかなあ？」

「えっ！えみ俺より南の方が好きなの……」

「そんな訳無いでしょ！結衣の為に聞いているの！」

「なあ〜んだ。良かった。でも『私の好きなのは翔太だけ！』とか言っただけだったなあ……」

すねた様子で翔太は言った。

「そんな恥ずかしいこと、みんなの前で言える訳無いじゃん！（好きだけどね……）」

ていうか話がずれてるよ！南君の好きな人は誰か聞いてたんじゃん！

「ごめんごめん。南の好きな人ねえ……。これ知ってるのは多分俺だけじゃないかなあ」

「だっ、誰!!」

「それは……」といってしばらく迷ってから、翔太は重い口を開いた。



第4話：翔太の罪滅ぼし from:emi

「それは……」

「私を信じて！本当に誰にも言わないから」

すると翔太は「じゃあ、えみのことを信じて話すから」と言って、ボール倉庫へ私を連れ出した。

そして今まで見たことの無いような真面目な顔で、静かに語りだした。

「あいつが好きなのは………結衣ちゃんだよ」

私は内心嬉しくて「本当！」と叫びそうになったが、翔太の真面目な顔を見て、まだ叫んではいけないと思い、グツと我慢した。そして翔太は話を続けた。

「なんで俺がこんなに真面目に話してるかというとき、ちゃんと理由があつて…長くなるけど話しても良い？」

「もちろん。その話詳しく聞きたい」

「1年の頃の話なんだけど…南、ある先輩に告られてさ。それで南は断ったんだ。その先輩のこと好きでもないし、1年生だから付き合うとかそう言うことは出来ない…って。」

でもその断った相手が悪くて…。学年1モテる先輩だったんだ。フラれることなんて、今まで1度も無くて。しかも1年にフラれたって言うのが気に入らなかつたらしくて。

その日から、南に対する嫌がらせが始まったんだ…。

下駄箱には毎日のように脅しの手紙と、ガラス片。廊下ですれ違いと足踏まれて。いたずら電話とかもしょっちゅうだったらしい。

日に日にその嫌がらせはエスカレートしていった。

その先輩、バスケ部にもそのことを言っただ。勿論モテる先輩だったから、バスケ部にも彼女のことを好きな先輩が何人もいて。それに南は1年ですでにレギュラーだったから、それに腹を立てて先輩も加わって、バスケ部でも嫌がらせが始まったんだ」

私はあまりの辛さに耐えられなくなつて、翔太に早口で聞いた。

「そつ、そのことは先生には言わなかったの？」

「言おうとしたよ。バスケ部全員がそのことを。」

でも南は『俺1人の問題だから、そのことでみんなに迷惑かけることは出来ない』って言って、バスケ部を辞めたんだ。

俺はそんな南の姿を近くで見ていたのに、何一つ出来なかった。

先輩が怖くて何も言えなかったし、先生にも言えなかったし…一緒に部活を辞めることも出来なかった。

あの時の自分をブン殴ってやりたいよ。

『なんでお前は、親友の為に何もしてやれないんだ!』って。思い出すと、本当に自分が情けないよ…」

私はあまりのショックで、何も言えなかった。

南君にそんな過去があったなんて…。中学1年生の彼には、重すぎる過去だ…。

「南が部活を辞めて、嫌がらせは段々無くなって。そのうち3年が卒業して、南もやっと部活に戻って来れた。

でも、あいつは変わっていた。

あの日から、女の子を極端に避けるようになった。

でも、最近やっとあの時の傷が癒えてきたんだ。女子に対する恐怖も段々と無くなったみたいで。

それで、少し前に南から、『結衣ちゃんのが好き』って聞いて、嬉しくて嬉しくて…。

俺はあの時何も出来なかったから。

今回は、少しでもあいつの力になってやりたい。

せっかく、人を好きになれたんだから、両想いにしてやりたい。

これは俺の、南に対するせめてもの罪滅ぼしなんだ…」

私は、こう答えた。

「結衣は、ずっと前から南君のことが好きなんだよ。いつも南君のことばかり話してる」

それを聞いた翔太は、目を見開いて「本当!？」と興奮気味に叫んだ。

私がこくりと頷くと、さっきまでの顔つきが嘘のように、パッと明るい顔になった。

「私達で協力して、2人をカップルにしようよ!」

「うん!じゃあ2人で協力して、南と結衣ちゃんをカップルにする為に頑張ろう!」

こうして私達2人は「南君と結衣をカップルにしよう同盟」略して、  
「M(南)Y(結衣)K<sup>カップル</sup>同盟」を結んだ。



#### 第4話：翔太の罪滅ぼし from：emi（後書き）

雨音の独り言：

皆さん初めまして。雨音咲です。

いつもスカーレットを読んで頂きありがとうございます。

今回は皆さんにいくつかお願いがあります。

1つ目：この小説を読んで、感想がありましたら、雨音の方までどんどん送ってください。（実はまだ1通も来ていなくて寂しいのです…）

なお、この小説の批判・悪口等は、雨音が大変傷つくので止してください。

また、評価等もして頂けると嬉しいです。

2つ目：もしこの作品を気に入って頂けたら、お友達などにどんどん紹介しちゃってください。たくさんの方に読んでもらえたら、光栄です。

以上、雨音でした。これからもスカーレットをよろしく願います。

第5話：1通のメール from：yui

今日は日曜日。

思えば、3年生になってから早1ヶ月。  
桜も散って、若葉の季節になった。

…マイナスに考えると、南君と一緒にいられる時間が、残り約1ヶ月…。

1日1日、何も無く過ぎていく…。  
私はこんなで良いのかなあ…。  
最近ちよつと不安になってきた。

考えてみると、私は南君とまともに喋ったことが…無い。  
せいぜい、挨拶したとかそれくらいだ。

このままで良いの!?

このままじゃ、本当に何も無く終わっちゃうよー!!

ピロリロリン

そんなことを考えてると、1通のメールが来た。

まあ、なんて場違いなメールなんだろう。

渋々、ケータイを見ると、見たことの無いアドレスだった。

迷惑メールかなあ？と思って本文を見てみる。

「件名：初めまして」

本文

初めまして、南です。バスケ部の、南隆宏。  
これから、どうぞよろしく。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

み、南君！？

なんで私のアドレスを知ってんだろう？

とりあえず、返事を打たなきゃ！

えっと…どうしよう。

緊張して、何打っていいか分からないよぉ。

とりあえず自己紹介を送んなきゃ。

「Re:初めまして」

本文

松下結衣です。メールありがとう。こちらこそよろしく。

…初めてなのに、馴れ馴れしいかなあ？  
でも堅苦しいのも嫌だし…。

ええい！もうこれで良いや！送信！

緊張と不安で、ソワソワしていると、返事が帰って来た。

「件名:Re」

本文:

俺、女の子とメールするの初めてだから、どんなこと打っていいか  
分からないよ…。

なんか、すごく緊張するね。

以外だった。

南君が、女の子と初めてメールするなんて。

もしかしたら、私と南君は、少し似ているのかもしれない。  
そんなことを思った。

それから、何回かメールは続いた。

最後のメールには「今度はメールじゃなくて、ちゃんと喋れると良いね」と書いてあった。

メールをしてみて、「南君と喋りたい」と強く思った。

どんな人なのか、もっともっと知りたい。声を聞きたい。そして…  
…両想いになりたい。

南君に対する想いは、日に日に強くなっていった。



## 第6話：初恋 from : takahiro

今さっきまで、俺はある人とメールをしていた。  
その人とは……松下結衣のことだ。

本当はずっと続けていたかったが、心臓が無理だった。  
これ以上続けていたら、あまりの緊張で、心臓が破裂してしまう。  
もともと、メールが苦手な俺が、女の子に、……ましてや好きな女の子にメールを送るのに、どれだけの勇気が必要か……。

初めて、松下結衣のことを知ったのは2年の頃だった。

彼女はバスケット部のマネージャーになった。

俺は一目で恋に落ちた。

……初恋だった。

それから俺は、気が付くと彼女のことを見ていた。

色白な肌。吸い込まれそうな瞳。はにかむ笑顔。

彼女のすべてに、俺は虜になった。

でも、緊張してまともに話したことは無い……。

本当はものすごく話したいのだが、どんなことを話せば良いかわからなくて、話せずにいる。

それに彼女も、男子とはほとんど話さないの、彼女から話しかけられたことも無い。

そんな俺の気持ちを知っているのは、親友の山本だけだ。

その山本が、昨日松下のアドレスを覚えてくれた。

あまりにも急に教えられたのでビックリしたが、山本の気遣いが嬉しかった。

「中学生生活もあと1年だ！ということは、好きな子にアタックするチャンスも1年しか無いんだぞ！！」

といって、俺を応援してくれた。

俺はいつか…いや、近々。

松下に自分の気持ちを伝えたいと思っている。

多分すごく緊張すると思う。

でも、もしも伝えられなかったら、その緊張の何百倍も後悔する。後悔するのは嫌だ。

でも、ひとつだけ迷いがあった。

西野が松下のことを好きなのだ。

俺は、後輩と初恋のどちらを選べば良いのだろう……。。



第6話：初恋 from : takahiro (後書き)

雨音の独り言：

こんばんわ。初めて隆宏の目線で書いてみましたが、どうでしたか？  
次話以降も、いろんな目線で書いてみようと思っています。  
果たして南と結衣の恋はどうなるのでしょうか！！

(… 実際、作者の私も分からないのですが(笑))  
今後も2人の恋の応援、よろしくお願いします。

また、感想等もお待ちしております。どしどし送ってください！お  
願います！！

以上、雨音咲でした。

第7話：朝の出来事 from：yui

楽しい週末はあっという間に過ぎ、月曜日になった。  
いつものようにバスに乗りつて学校に行く。  
バス停から歩いていると、急に声をかけられた。

「おつ、おはよう」

振り向くと、そこには南君がいた。

「おはようっ」

あまりに突然にビックリした私は、声が少し裏返ってしまった。

そして、南君の一言がきっかけで、2人で並んで登校することになった。

こうして並んでみると、南君は大きいなあ……。 (私は160CM。  
南君は178CM)

「この前は、メールありがとう」

少し照れながら南君は言った。

「こちらこそありがとう。」

…私ね、『南君が女の子と初めてメールする』って送って来た時、  
ビックリしたよ。

なんか以外だった」

「そう？でも俺、本当女の子とメールとか話しかしなくて。

…話しかしたいんだけど、何話せば良いか分かんなくて…」

「でも、今日は話しかけて来てくれたじゃん」

「俺、松下と話してみたかったからさ…」

その言葉を聞いて、私は自分でも分かるくらい、カーアツと顔が赤くなった。

「でも、なんか不思議だよ。初めて話すのに、すごく自然に話せる。俺にしては珍しいよ」

そう言っつて、南君も少し顔を赤らめた。

「本当だね。私も男の子と話す時はなんか不自然になるタイプなんだけど、今はすごく自然に話せる」

確かに、自分でもすごく不思議だった。

まともに男の子と喋れない私が、大好きな南君とこうして普通に話せているなんて。

「なんか今急に思ったんだけどさ……もしかしたら、俺達って少し似てるかもね」

その言葉に、私はすごくビックリした。私もそう思っていたからだ。  
「私も思った！それに、これは今初めて分かったんだけど、南君と一緒にいるとすごく安心するの」

「今までは気が付かなかったけど、俺達って相性良いかもね」  
そう言っつて、私達は微笑んだ。

この日がきっかけで、私達の距離はすこしずつ縮まっていた。



第8話：下校中… from：takahiro

日曜日、山本に電話をした。

「俺はどうすれば良いのか」と。

もし、松下と上手くいったとしても、西野がいる。

松下との距離を縮めたくても、西野の事が気になってしまう。

山本はすこし悩んで言った。

「西野が気になって恋が出来ないのならば、西野にお前の気持ちを伝えれば良いんじゃないのかな？それで結衣ちゃんと仲良くなれば、後悔もしないはずだよ」

そして付け加えた。

「でもまずは、結衣ちゃんと話してみなきゃ始まらないよ！

明日の朝にでも、話しかけちゃいなよ！」

俺は、「そんな事、いきなり出来無いよ！」

と言ったものの、山本の言う事は最もだと思った。

まだ、話してもいないのに、こんなに先の事ばかり考えてはいけ無い。

先を見る前に、足下を見なければ。

「大丈夫。俺も途中まで一緒に着いて行くから」

「……本当に平気かなあ？」

「そんなふうにもじもじしていると、結衣ちゃんに嫌われちゃうぞ！」

「…じゃあ、思い切って話しかけてみるよ！」

そして月曜日の朝、俺は山本に背中を押されて、松下に話しかける事が出来た。

自分でもビックリした。

初めて話したのに、自然に話せる。

松下も俺と同じようにすごく楽しそうだった。

この日から、松下と少しずつ話すようになった。

ほんの一言の会話でも、俺にとっては、彼女と話せるという事だけでとても嬉しかった。

一緒に笑えるという事が、楽しかった。

そして、もっともっと、好きになった。

そんなある日の事だった。

下校していると、急に雨が降って来た。

俺は傘を持っていなかったたので、すぐ近くの公園で雨宿りをする事にした。

俺は猛ダッシュで公園のベンチへと向かう。

そして、ピタリと足を止めた。

そこには、松下がいた。  
なんだか、いつもとは違い大人っぽく色気のある彼女に、俺の心臓はドクリと鳴った。

そして、話しかけようとした瞬間。  
逆方向から誰かが走ってくる。

小柄でかわいらしい顔。  
トレードマークの赤い靴。  
手を振りながら、松下のもとへ走って行く。

……その男は、まぎれも無く西野だった。



第9話：雨と涙 from : takahiro

俺は、こんな事してはいけないと思い、その場から立ち去ろうとした。

別に、松下は俺の彼女でもなんでも無い…。  
誰のものでもないんだ…。

だから西野が何をしようが、俺には……関係ないんだ…。

でも、なんでこんなに胸が苦しいんだろう。

俺の理性は本能を押さえきれなかった。

松下の事を好きだという気持ちは、押さえきれなかった。

そして、気が付くと、2人を見ていた。

「すいません！！僕から呼び出したのに遅刻するなんて！！本当にごめんなさい！！」

「大丈夫だよ。そんなに待ってないから。それより、話してなあに？」

西野はまっすぐ松下の顔を見て、ゆっくりと言った。

「俺は、かつこ良くもないし、男らしくもないし、結衣さんよりも年下です。」

「…………でも、こんな俺だけど、結衣さんの事を想う気持ちは誰にも負けない自信があるんです」

「結衣さんのこと…………ずっとずっと好きでした」

松下は目をまん丸くして、西野の事を見ていた。  
信じられないというような目だった。

「西野君……………私は……………」

その時だった。

西野の顔が、松下の顔へと近づく。

そして、2人はキスをした。

バタッ

俺は持っていた鞆も思わず落とした。

その音で、2人は一斉に俺の方を見た。

「みつ、南君！！！」

「先輩！！！」

俺は、なりふり構わずそこから逃げた。  
もう、この場所に居る事が辛かったんだ。

「南君、待って！！！」

そう言つて。追いかけてくる松下を俺は無視した。  
彼女からも逃げた。

走って、走って、走って…。

俺は、膝から地面に崩れ落ちた。

雨に濡れたコンクリートはただ冷たくて、俺の心はきりきりと痛んだ。

どうしてなんだよ……。

俺は、どうすれば良いんだよ……。

なんだこんなに、辛いんだよ……………。

俺の目から、一筋の涙がこぼれた。

松下は、何も悪い事なんてしていない。

ただ、西野とキスをしてしまった……それだけだ。

悪いのは、2人の事を勝手に見ていた俺の方なのに……………。

雨に打たれながら、俺はただ泣いていた……………。



第9話：雨と涙 from : takahiro (後書き)

雨音の独り言：

こんにちわ、雨音咲です。

第9話は、書いていてとっても切なくなりました…みなさんはどう感じましたか？

今日は、この「スカーレット」の名前の由来を話したいと思います。  
由来は実に簡単です。

皆さんは「スピッツ」というバンドを知っていますか？（とっても有名ですよね）

私はその、スピッツのスカーレットという歌が大好きなので、思い切って小説の名前にしました。

歌詞が、切ないんです…（涙）

この歌、本当に良い歌なので、機会があれば是非聞いてみてください。  
い。

あと、小説の感想も待ってまあす。

以上、緩ーい感じで現場の雨音がお伝えしました。

第10話：後悔 from：yui

罪悪感…。

私の頭の中は、その事で一杯だった。

昨日、私は西野君に告られ、キスまでしてしまった…。  
そして、その場面を南君に見られてしまった…。

はあ…。

私は一体何をしているんだろう…。

どうしてあの時、きちんと断る事が出来なかったのだろう。

「私は、他に好きな人が居ます」…と。

その一言がきちんと言えてれば、南君も西野君傷つける事は無かった。

あの時の南君の顔は、一言では言い表せない位悲しく、辛そうな顔だった。

その顔を見た時、私はやってはいけない事をやってしまった…と深く後悔した。

そしてきつと、西野君も悲しかったと思う。  
あんな中途半端な答え方をしたら、かえって嫌だろう。

私は、ただ悩んでいた。

悩むだけで、何も出来ていない自分に余計腹が立った。

「結衣く？起きてますかあ??」

私がハツとすると、目の前にはえみが立っていた。

「何か悩み事？」

「…うん。かなり深刻な悩み事…」

「そっか…。私で良かったら相談乗るよ」

「……………って訳で、私すごく自分が嫌で…。昨日の事すごく後悔してて…」

えみは、しばらく悩んでからこう言った。

「結衣は、この後どうしたいの？」

「えっ！それはもちろん、南君の事が好きだから……………多分…」

「ほんの少しだけでも、西野君の事好きなんじゃない？」

そう言う優柔不断な気持ちだと、どっちも逃げちゃうと思うよ」

「結衣が、本気で南君の事を好きなら、南君ときちんと話しなよ」

えみの言葉を聞いて、私は自分の気持ちがいなくなっている事に気づいた。

私は、本気で南君の事が好き…？

なんでこんなに悩んでるの？

2人とも失いたくないから？

クエスチョンマークばかりが私の頭に浮かんだ。

南君。

あなたはとうですか？



第10話：後悔 from：yui（後書き）

雨音の独り言：

9月に入り、私雨音も何かと忙しい毎日です。

なので、小説の更新が遅れてしまっています。  
すいません。

…でも遅れてしまう分、今まで以上にまっすぐな文を書きたいと思っています。

そんな訳で、これからどうぞよろしくお願いします。

第11話：交差する心 from：yui

何も出来ぬまま、時間だけがただ過ぎて行く。  
たった今、部活が終わった。

えみの言葉が何度も何度も頭をよぎる。

「南君の事、本気で好き？」

その事をただ考えていた。

私は南君の事が好き。

……でも本気がどうかは分からなかった。

だってまだ恋人同士でもなんでもない、ただのクラスメイト。

……クラスメイトだけど、特別な存在。

ねえ、えみ。

本気で好きじゃないといけないのかな？

こんな未熟な気持ちで恋しちゃいけないのかな？

ふと南君を見ると、なんだか暗い表情で下を向いていた。  
そういえば、プレーもいつもとは違ってミスが目立っていた…。

私はあらためて、南君を傷つけてしまったと思った。

そんな南君の姿を見るに見かねたのか、西野君が南君に声をかけた。  
「先輩……ちよつと良いですか？」

私は、まるで昨日の南君のように2人会話に耳を澄ませた。

（でももしも、相手の子が西野君じゃなくて女の子だったら？

目の前で告白されて、キスされて……）

南君はこんな思いで、私達を見てたんだな……。

「昨日は……本当にすいませんでした!!」

西野君は、深く頭を下げていった。

「別に西野はなんにも悪くないよ。……ほら顔を上げて。  
隠れてみてた俺が悪いんだよ」

「そんな事無いです！」

好きな女の子が、他の男と2人きりで話してる姿、誰だって見ちゃ  
うと思います」

「……えっ……」

「僕気付いてたんです。

先輩は結衣さんの事、好きなんですよね」

「……………」

私は、驚きとともに、嬉し悲しいどうしようもない気持ちになった。

「知っててあんな事するなんて僕最低ですよね…。  
でも、僕怖かったんです…」

「怖かった…?」

「結衣さんが先輩に取られちゃうと思うと怖くて。  
だから少しでも結衣さんに僕の事を好きになって欲しくて…告白して、キスまでしちゃったんです…」

「西野…」

「…………でもダメでした。  
どんなに僕が頑張っても、結衣さんの目には先輩しか映ってないんです。」

僕じゃ無理なんです。結衣さんを幸せにする事、出来ないんです」

そう言っている彼の目は涙で一杯だった。

「だから先輩お願いです。僕の代わりに、結衣さんの事を幸せにしてください」

第12話：ずっと伝えたかった事 from: yui

私はその場を立ち去ろうとした。

……だってこれ以上聞いていたら、あまりにも悲しくて涙が出そうだったから。

足を一步踏み出したその時だった。

「なあ、松下。……お前は本当に俺で良いのか？」

驚いて振り向く私を見て、「そこに居るのはなんなんだけど……今の  
と口の端だけで笑みを作る。悲しそうな微笑みだった。

「西野が居る前で、こんな事言うのはなんなんだけど……今の  
俺じゃ、松下の事を幸せに出来ないと思うんだ」

一瞬その場が凍り付く。

慌てて西野君がその事を否定する。

「先輩、何言ってるんですか！結衣さんの事を幸せにできるのは…

先輩だけなんですよ！」  
訴えるような目で言った。

南君は、その訴えに静かに返事をした。

「今の俺は、お前みたいに、相手の気持ちをそんなに大切に思う事は出来ない。

俺よりも西野の方が、ずっとずっと松下の事を幸せに出来ると思う

……」

「先輩……………」

2人とも黙って下を向いてしまった。

何とも言えない空気に、私は包み込まれる。

しばらく沈黙が続いた。

そして私は、自分の気持ちをきちんと2人に伝えようと思い、そつと口を開いた。

「私にとっての幸せは…、みんなで泣いたり、笑ったり、怒ったり、

喜んだり……。

人といろんな事をわかち合えるって、すごく嬉しい。

その瞬間、私は1人じゃないんだって思う。

たくさんの人に支えられてるんだなって実感する。

そういう事って、すごく些細な事なんだけど、凄く新鮮で大切な事  
だと思う。

当たり前のような毎日が、すごく幸せで……」

不意に、涙が溢れてきた。

悲しい訳じゃないのに……、なんだか嬉しくて……。

その涙を、必死にこらえて話しを続けた。

「南君は私の事を幸せに出来ないって言ってるけど、南君が思ってる  
幸せは……私が思ってる幸せとは違う気がするの……。

南君は、物語のような完璧な幸せを思ってる……そんな気がする。  
私は、完璧じゃなくて良い。不器用で良い」

「ただ……あなたの傍に居るだけで良い」

「……こんな俺の、傍に居るだけで……？」

私は、その言葉にゆっくりと頷いてから、西野君に小さく「ごめん  
ね」と呟いた。

そして、南君に最後の一言を。ずっと伝えたかったことを、ありったけの勇気を振り絞り伝えた。

「南君の事が……………好きです」

心臓が破裂しそうな位ドキドキとなる。

そのドキドキがバレないように、南君の目を真っすぐと見た。

そして、ゆっくりと南君が答えた。

「……………ありがとう。そう言ってもらえて、すごく嬉しいよ。  
俺も……………松下の事が、好きです……………でも…」

「でも、まだ今は、付き合う事は出来ません。」

誰にも負けない位、松下の事を好きって言う自信が無いから……。だから、自信を持って好きと言えるその日まで……。待ってくれませんか？」

こうして、長い1日が終わった。

そして私達2人は、新たな一步を踏み出した。

第13話：一応受験生です from: yui

早いもので、明日から夏休み。  
あの日から約1か月が経った。

私達2人の間で、特に何があったという訳ではない。  
でも、そんな毎日がすごく楽しかった。

唯一変わった事と言えば、南君が私の事を「結衣」と呼んでくれる  
ようになった事。

今までは名字で呼んでいたけど、告白した次の日に「結衣」と呼ば  
れた。

あまりに突然だったのでビックリしたけど、凄く嬉しかった。

好きな人から、名前と呼ばれるのってこんなに嬉しいんだ。

そんな呑気な事を考えていると、先生が背広をビチツと決めて教室  
のドアを開けた。

そして手には、何やら白い書類が…。

通信表……。

成績の事を考えたら、南君の事を考えてられなくなった。  
もしこれで悪かったら、南君と一緒に高校なんてとても無理だ……。

出席番号順に名前が呼ばれる。

この待っている間の緊張感が、たまらなく嫌だなあ……。

「松下結衣！」

恐る恐る、中を開けてみる。

.....  
.....

オール3。これって良いのか悪いのか…。

先生の言葉には、

「授業態度がどの教科も良いようです。提出物も良く出ています。……ただ、テストの点数をもう少し良くしないと、志望校合格は厳しいです……」

と書いてあった。

頭の中に「ガーン」と言う言葉が連打する。

……こんなじゃ、南君と同じ高校に行けないよ……。

夏休みになんとかして挽回しなきゃなあ……。

するとえみがスキップしながらやって来た。

「どうだったあ？」

その口調やさっきのスキップから見て、えみはきつと成績が良かったんだろう……。

こう見えても、えみは結構頭が良くて、クラスで上位3人ぐらいには入っている。

私は通信表をえみに差し出す。

「志望校合格は厳しい……かあ。そんな事書かれちゃ落ち込むねえ……」

「まあ、テストの点が悪かった私が悪いんだけどね……」  
そう言くと、思わず溜め息が漏れた。

もっとテスト勉強ちゃんとすれば良かった……。

「でもさあ、他のは出来てるんだから、テストの点さえ良くすれば良いんでしょ？」

「まあそうだけどね……。でも、もう3年の後半だし……かなり頑張らないといけないよね……」

さらに落ち込む私に、えみが肩を叩きながら言った。

「大丈夫！私達の県は3年の成績全部が評価されるから、まだ望みはある！！」

それにさあ、夏休みに南君に勉強教えてもらえば良いじゃん！！」

「でも、大会もあるし忙しいんじゃないかな…」

「大会終わってからでも良いじゃん！あとは自分の力でどうにかするしかないねえ」

そう言つて、ちよつと意地悪そうに笑うえみ。

そして、翔太君も南君を引き連れて私の所にやってきた。

この2人もきつと成績良かったんだろうなあ。

この中で、バカなのは私だけか…。

「ねえ南君！夏休み中に結衣に勉強教えてあげて！！」

お願い！と言つて手を合わせるえみに、南君は案外すんなりと答えた。

「俺なんかで良かったら、喜んで教えるよ」

嬉しさと驚きで、目が点になる私。

「ほら結衣も、教えてもらうんだからちゃんとお願いしなきゃ！！」

「あつ…はっい！」

あまりの驚きに声が少し裏返ってしまった。

「えつと…バカな私だけど、一生懸命勉強するので、夏休みの間先

生よろしくお願いします！」

すると南君は、優しく笑って「じゃあ、この夏休みに頑張ろう！」  
と言ってくれた。

「南先生よろしくね！」

声を揃えて言う、えみと翔太君。  
なんだか私以上にやる気満々だ。

なんか期待されちゃってるけど……みんなの期待に答えられるように、そして南君と同じ高校に行く為、頑張らなくてわ！

中学最後の夏休み。

……恋に受験に部活にと忙しい夏になりそうです。

第13話：一応受験生です from: yui (後書き)

雨音の独り言：

皆さんこんにちわ。お久しぶりに雨音です。

今回は中学生の本業、受験について書いてみました！

今までは、年齢を内緒にしていたのですが、この機会に公開します！  
そう！私は結衣や南君と同じ中学生です。

なのでこれからは、2人の恋はもちろん、受験や部活、中学校の行事  
etc...。

現役中学生ならではの目線から書いて行こうかなと思っています

風邪が流行ってますが、体にはお互い気を付けましょう。

それでわ今日はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8532a/>

---

スカーレット

2010年10月12日08時15分発行